九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[021]史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2340929

出版情報：史淵. 21, 1939-08-15. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

彙報

第十一回九州史學會大會

昭和十四年度の九州史學會は六月十八日開催す。

○展覽會

午前九時より九州帝國大學法文學部列品室に於て行ふ。本學部史學關係教官の出品を中心とし其の他諸方面よりの御出品を得て西洋文明（和蘭を主とす）の東洋への波及の經路、東西文明の交流を概觀する目的の下に、古地圖類、古版畫、古書、陶磁器、マリヤ觀音、南蠻切、薩摩切子等、興味深きものが數十點陳列された。

○講演會

午後一時より福岡市因幡町、縣教育會館に於て左の講演あり、左に諸先生方の手記を頂いて梗概を記す。

一、室町時代に於ける佛教經濟思想、特に利子論の展開　文學士　伊奈健次氏

室町時代に於ける貨幣經濟の發達に伴ひ、佛教寺院はその蓄積せる資本（專ら銅錢）を以て盛に高利貸的金融を行つたことは現存せる社寺關係の貸借證文によつて窺ひ得る如くである。之は當時の社會經濟的事情が然らしめる所ではあるが、その基調となる佛教的經濟思想特にその利子論に於て微利を認容してゐるからである。故に本講に於てはその利子論を佛教經典特に律典に遡つて考察し、之等を反映してゐる奈良時代佛教寺院の資財帳及び延暦寺禁制式を檢討して日本佛教の經濟思想が有部派の思想を受けてゐることを論じ、國家法又之に追隨してゐることを指摘した。そして上代土地經濟時代に於て新田開墾へ投ぜられる寺院資本は貨幣經濟の進展と共に高利貸的金融に利用せられることによつて室町時代には寺院資本の活動が活潑をなつたと論じ、當代凡百の寺院の貸付資本は明にその思想に立脚してゐることを次の如き諸名目を附した貸付資本の存在によつて例示した。即ち「佛物用途」「寺物用途」「上分物用途」「造營料足」「修造料足」「燈油料足」「講會料足」「祠堂錢」なる名目錢の貸付である。而して之等の名目的貸付が當時の經濟上持つ所の特殊性として、その利率が低率なること、德政令を免除せられるに至つたこと、債務者の債務返濟觀念が特に深かつたことを指摘した。之等の名目的貸付以外の寺院の利錢貸付も要するに此の思想に基き一般高利貸的利錢貸付の發達に順應して發達したものであつた。而して近世江戸時代に於ける社寺の祠堂銀、名目

金の貸付は近世的意義を持つ一面かゝる中世的傳統を受けたものである。

一、唐憲宗朝文學

九大教授　目加田　誠氏

唐の文學は官僚の文學である。政治的な環境がその文學に與へた影響は一層著しい。憲宗朝の初めは天寶の亂後の失墜せる中央政權の回復、諸種の改革革新を目指した時代である。この時代の文學が如何に之を反映したか。當時の載道主義諷諭主義の文學、又當時の代表的なる文學者、韓愈とその一派、元稹と白居易、柳宗元と劉禹錫その他の人々の文學上の活動、相互の關係及聯絡、夫々の本來の傾向、代表的作品の製作契機などをそれら互の因果關係の上に考察し、やがて憲宗の倦怠、朝廷の墮落と共に、之ら文學の歸する所を述べ、結局は遂に夫々の性の趨く所に向ふ次第を語り、その間に色々支那文學の一面を知る可き挿話と意見を交へた。

一、西洋の異國情調

九大教授　長　壽吉氏

西洋でも異國情調はある。異國情調とは、自國の文物制度風習考へ方等とは異つて、注意が生じうる、又興味をもちうる、又好むことの出來る外國のそれに對し、見聞や交通からを通じて、憧れ傾くことが、一般的になつたその風潮を言ふので、個人的な嗜好でなく、又尊敬心醉畏怖等でもない。之に至る前提とも考へられるが、それではない。文明史的にはそれは文化展開の契機、文化進歩の培養となるもので、決して看過し、或は排斥すべきものでない。尊敬心醉畏怖却つて自己を喪ふの類ではない。

かのヘブライ族がエジプトの生活から、故郷に歸つたその「外國の旅から歸る」の、エキソドスなどは、ヘブライ二王國の文化の上の、異國情調の影響が考へられる。紀元前三千年の楔形文字のタブレット記文にも、最古い異國情調の記錄が見られる。フェニキヤ人の通商と、エジプト後王朝の幻想的紋樣との關係、ペヒスタン岩壁墳墓の彫刻、これらも參照されよう。ギリシヤ人は求心的內省的なその文明から、異國情調には緣遠かつた。アレクサンドリヤ文明の溫床は、異國情調であつた。ローマは波斯信仰に溺れて國本を失つたが、それほど又、クリスト教も傳播する所以もあつた。ビザンチウム遷都も參照されよう。

大食人の事業のうちに、マルコ・ポロの旅行も、更に十字軍も包括される。果して中古後期に、西洋の異國情調が明白に見えはじめたのである。衣食住ともに、その上に認められる。蒸風呂、コルドヴの皮、更紗、時計、東

洋服、騎士の肉、骨牌、將棋の如き、例は數々ある。實に文藝復興の文化環境は、東洋的異國情調であると謂ひ得る。十六世紀以後異國情調を動かした史實は、ロシヤの出現、レヴァント通商、海外經營、オスマントルコ侵入である。加ふるに、中古的拘束が失はれ、宗教動亂が鎭るにつれて、旅行の趣味と安易とが急速に增加した。飄旅の心地、未知世界への憧れ、皆これである。

巴里の國立圖書館にある風俗スケッチ。東印度會社が莫大の利益を得た事情。和蘭デルフト、殊にハウダ陶畫。ホイエンの風景畫。これらの上に就いて、吾々は充分に異國情調の横溢をあとづける。建築に、庭園に、家具に、異國の趣味がとり入れられる。殊に支那趣味の流行、辯髮の影響もある。乾隆帝が自ら油繪を試み、使を遣して西洋印畫術を學ばせたことは、大きな影響を與へた。ルイ十四世宮廷では、パゴダを描いて、その前で支那服の舞踏會を開き(一七〇〇年)、ローマのフランス學院では、學生が土耳古風俗で行列を行つたのである。(一七四八年)。

異國情調は、文學と學術の上に發達を與へた。世界旅行記、印度物語、成吉斯汗傳の著作等々の外に、シヤールヴォワの「日本物語」、ドギーヌの「匈奴物語」、グロシエの「支那物語」の如き、名著大作も生じた。ドギーヌとグロシエとは、九州帝大に藏せられてある。これらは歷史、地理、言語、風俗等の上の進步した研究を促した。フランスは殊に進步した。東洋研究は、十八世紀に於けるフランス知識界の、重要なる一部門となつた。他の西洋諸國も同樣の經路を有した。異國情調は文化の展開進步の刺激となり、培養となり、滋味となつた。

○晩　餐　會

午後五時より教育會館の階下にて晩餐を共にす。席上會員の研究發表あり。

一、德川時代一小農村に於ける人口變動　宮崎百太郎氏
一、スキタイに就いて　戸上駒之助氏
一、貝原益軒の和學に就いて　青木義憲氏
一、ヘルデル編「ドイツの特性及び藝術について」　小林榮三郎氏
一、五代に於ける契丹と支那との海上交通　日野開三郎氏

出席者約三十名で午後九時頃散會した。(中江)

西洋史學研究會

昭和十四年五月六日、六月一日、七月一日、演習室において例會開催、左記の紹介があつた。例によつて各紹

介者を煩はしてその概要を記することにする。なほ六月一日には臨時講義（宗教改革史、殊にルーテルの事蹟について）にて御來學中の廣島文理科大學渡邊教授歡迎會を兼ねて同教授の御臨席を仰ぎ、有益にして興味ある宗教改革當時の「寛容と非寛容」について御話を拜承し得たことをこゝに記して深く感謝の意を表する。（辛島）

Die Propaganda der Emigrauten. (F. Hempelmann, Die Emigranten u. die französischen Revolution in d. J. 1789—92. Hamb. 1935. Teil. 3. SS. 42—53)　　辛　島　重　義

「プロパガンダもそのジステームを持つ、そして勝手に使用せられてはならない。プロパガンダは大いなる理想と未來力的な原理のために長期に亘り用ひらるべきである」とのゲツペルスの言を冒頭してヘンペルマンは佛蘭西のエミグレ達のプロパガンダに關して云ふ。佛蘭西革命は獨逸民族に異常なる刺戟を與へた。自由の思想が多くの階級を熱狂せしめ、教養ある社會に殊に詩人と學者とに於て著しい。要するに全歐洲が總て自由の思想に浸潤し佛革命に對して好意を持つてゐた。此反面には獨逸民族は最初からエミグレに友好的な態度を示す。之は外國人に對する偏愛とされる。外國の貴族と交際することは自らを高めるものとしエミグレ達に全くの友情を持つてゐたのである。所が此思想に大きな變動が來た。それはコブレンツに於ての暴擧であり、買占による物價騰貴は如何にして佛革命が生じたものかの原因を獨逸人に示すものであつた。所で獨逸の諸侯は勿論革命に反對である。同じ運命が自分達の上に襲ひ來ることを恐れると共にエミグレに味方した。エミグレの宣傳の目的は勿論此諸侯を獲得して古き地位に還らんとするに在つた。彼等はその窮狀を涙ながらにしてあらゆる方面に知らせたのである「歐洲は助けてくれねばならぬ」と。その方法の第一として皇帝レオポルドを獲得するに在る。王は此要求に遠慮しがちであつたから、彼等は Pavia, Padua Mailad, Mantua 等の協約を結んだのである。Hamburgische Politische Journal, Wiener Zeitschrift により、彼等は革命の殘酷さを報道して人道主義に訴へた。曰く「捕へられたものは自由の名に於て黨派狂の最も不幸なる犧牲に供せられ父はその子を子は母を呼び、搖揺の子は愚民の自暴自棄と狂氣との叫聲に初めてその存在を知る」と。又レオポルド帝の卓上談を發表して皇帝がエミグレ側にあることも宣傳した。レオポルドの歿因をジヤコバンの毒殺に歸し、スエーデン皇帝の暗殺事件も亦彼等の利する所であつた。又佛蘭西内に於ける宣傳運動の機關にも Journal politique national, Actes des Apôtres, L'ami du roi, Mercure de France, 等が擧げられるも、佛蘭西に於ては宣傳効果は大ならざるもの

があつた。要するにヘンペルマンは云ふ。立派なプロパガンダの外的特徴をエミグレのそれに見る。それは戰鬪意識が濃厚であり、不斷に耐まずその目的達成に向ふ。その効果を生ずべくあらゆる手段がとられる。宣傳は倦み厭んではいけない。常に目的を達し、常に戰はねばならぬと。

Albert G. A. Balz, The Indefensibility of Dictatorship—And The Doctrine of Hobbes. (The Journal of Philosophy. Vol. XXXVI. No. 6, March 16, 1939. pp. 141—155)

大杉知惠子

ホッブズ（一五八八—一六七六）は機械論的感覺主義的認識論に立ち自然主義的倫理學說を建て、人類は凡べての動物と同樣に自己保存をその根本慾望とする。この立場より見れば生命保存は善、それを阻止するものは惡となり、快樂は善、苦は惡、而して功利主義が誘導される。かうした人間が自己愛に動かされてゐる萬人鬪爭の狀態から所謂政治社會を建設して行く方法は唯、多數決により個人意志を一個の意志に統一する「社會契約」である。かくて人間集合狀態はローマ法的委任觀念により統一ある社會となつた。臣民の意志の統一された主權には、一、主權は不可變、二、主權は無責任、三、主權は法の上に位する等々をあげて、その唯一絕對性を確保せんとする。併し論者は獨裁は政治的理論より觀るならば國家並びに政府の理論ではないとして理論的に獨裁が成立せぬ事を以て論を結んでゐる。即ち獨裁は善と善の機關たる獨裁者自身の有用性の限界を否定する。從つて彼の論によれば政治國家に誘導されて再建されるものは又自然國家である。この還元こそ獨裁の持つ誤謬であらう。獨裁は唯詭辯的混亂がその苦境ををほう時にのみ存在しうる樣である。政治哲學的にして何等歷史的色彩を持たない此の論文はアメリカの所產たること、即ち專制主義對民主主義といふ現代史的觀點から見る時興味を與へるものがある。社會的環境・傳統を無視した理論が地球上の凡べての部分に適用さる可きものではない。

Emil Dard, Le dernier ami du Talleyraud. (Revue des deux mondes. t. 50 (1939) 1er Livraison (Mars) pp. 88—106)

辛島重義

佛蘭西の復古王朝時代に於て、政治家タレーラン（Charles Maurice de Talleyrand-Périgord, Prince de Bénévent. 1754—1838）と哲學者にして政治家なるロワイエ・コラール（Pierre Paul Royer-Collard. 1763—1845）の廿五年間に亘る親友關係は特に興味を惹く。それは單に彼等の晩年に於てゞあつたと云ふのみで

なく、相互の、或はタレーランの姪娘ディノ（Mme de Dino）に與へたる深き感銘、又タレーランの後生涯の政治生活に非常に大なる影響を及ぼしてゐる點特に重要である。「Soulèvement intérieur なくしては相見るを得ない二つのもの、王殺しと結婚せる僧侶」とはコラールの平生の言であつたにも拘はらず不幸にも此二つを兼備へたるタレーランがディノを伴ひ二十粁の隔りの惡路をも厭はず馬車にて訪問したのは一八二〇年の夏である。ベリーに於て始められたる此會見は後巴里に移り、政治的に兩者が緊密に結合するに至る。即ち一八二一年にはリシュリュ内閣の更迭に際して、タレーラン内閣を計畫したのも（モレの記す所によれば、王にタレーラン内閣を進言したるはバラントとコラールである）又タレーランは上院にコラールは下院に於て熱烈にヴィレール内閣に新開法を彈劾したのも兩者相結んでの政治的反對運動であり、又一八二二年外相シャトオブリアンの西班牙干渉問題に關しても相提携して反對したのであつた。かく兩者が政治意見上緊密に結合すると共に兩者の相合ふ機會も多く、政治上に及ぼせる影響も大である。ティエール・ギゾーの如き人々もこの兩者の關係に影響される所多く、ディノが駐英大使たる「此時代のタレーランの書簡はコラーラが通信し又認める所のものである」と記す程度の兩者の關係が接近してゐた。タレーランを「惡德」と稱して心證的に嫌惡したシャトオブリアンは一八一五年タレーランが、フーシェと共にルイ十八世に謁するを見て「惡德、罪惡の腕に凭る」と評した程であつたが、後年コラールと共に學士院に入るを見れば「惡德、善德の腕に凭る」と批評するを得たであらうとは筆者エミール・ダールの言である。尙本論文はタレーラン、コラールの書簡集（Mélanges de la Société des Bibliophiles français 又ラクール・ガイェ編 Revue mondiale 1928）バラント男等の日記・覺書による知きもタレーラン覺書（ブロリー編）にはコラールに關するもの尠し。

Edmond Vermeil, Pourquoi une religion nationale en Allemagne? (Revue de Métaphysique et de Morale. 46e ann. (1939) No.1. (Jan.) pp. 65—88)　　幸島重義

筆者は獨逸史に於ける Morcellement territorial 即ち Partikularismus の重要性を冒頭して此地方の多數分裂性とこれを統一する國民思想並びに未來國家の夢との關係が地方の舊來の Christianisme confessionel と新興勢力たる Weltfrömigkeit（ヴイマルの古典主義と全浪漫主義とにその表現を見出す世界宗教）との對立を來さしめた。即ち地方各國が教會國家 Eglises Etats なることに反對する運動は佛革命に先ずる半世紀に啓蒙主

義と敵度主義とから現出して來た。此新宗教運動は民族及國家の概念と結合し、更にゲルマニヤ主義に移つたと、筆者は Hegel, Hölderlin, Schleiermacher, Novalis, Fichte, Goethe, Schlegel.（筆者の論の順による）等を例證して國家的なる性格と、この「國家」たる獨逸の精神を統一する力としての宗教との融合の歴史を論じ、之等の人々の或は空想的な或は現實的な國家觀が、一八五〇年代の産業革命を經、ビスマルク時代を經て、世界大戰となり現在に及んだことを述べる。ビスマルク時代には二つにして一なりし獨墺の一致は再び二つの Foyers に排棄せられ、それが逆轉して一九三八年の獨墺合邦の事件となつた。斯の如き變化の原因は獨逸に於ける nihilisme により生ずるもので、此 nihilisme とは古き價値を否定する、人間性が一つの運命、一つの共同體へ進むべき場合に必然なるべき一の逃避の場所である。獨逸の場合この nihilisme は古き價値を否定して、此否定することに脅かされる所の古き諸價値への代置として民族主義に到達したのである。然して此民族主義へと進むことは更に又擬科學的なる biologisme, racisme populaire、に嚴密に民族的なる宗教に達する。biologisme の名に於て民族的宗教は他宗教の價値を否定し、哲學と宗教とは ancillae scientiarum「學の婢僕」とされつた。正に獨逸の悲劇とは機械的軍事的なる文明と基督教の起源を持つ文化との相反による。然らずしてナチスと confessions chrétiennes との間の爭鬪の理由を了解し難いであらう。この二つの爭鬪とは世界に通有のものであり、獨逸はその選擧場裡となつたに過ぎない。こゝにこそ獨逸の一宗教的なる原因と見る。即ち一民族、一國家、一宗教を標榜するナチスは如何に宗教的なる性質を持つことか。ナチスたること全體が一の宗教たり得るのである。國家自體はその實現の一道具にしか過ぎないのである。

Karl Kind, Luthers Kampf gegen das Judentum. (Die Neue Literatur, Jahrg. 40 Heft. 2. Feb. 1939. SS. 71—77)

大杉知惠子

所謂獨逸人の猶太化に對する神聖なる危惧の念に驅られてものされた Luthers Kampfschriften gegen das Judentum, hrsg. 1935 により彼の猶太人への態度を述べた此の小論は冒頭、ルッターの猶太人觀より始まる。即ち彼は古イスラエルの民と今日稱するところの猶太人、換言すればゴルゴタ以前と以後の猶太人との間に判然と區別を附け、今日の猶太人には民族を否定して居る。其の昔豫言者、基督・使徒を齎した猶太人は異教の徒に侵されること度を重ね、その結果彼等は當然全世界

より合流し難を避け各國に散在する私生子たるを免れない。斯くカナンの地を去りエルサレムを捨てた彼等には嘗つて與へられて居た法律も當然認められず、又ホセア書に示される如く彼等には舊譯を聖典として讀む權利も剝奪されてゐる。ルッターは此の猶太人一族の仕事とも見らる可き高利貸を論じ、諸々の惡德を擧げ而して其の根源を形而上學的なものに於いて見出して居る。對猶太政策として苛酷に過ぎるかの具體案、提示されては居ても論者の評する如く、猶太人の形而上學的原理の上には何らかの形而上學的それが置かれない限りに於いてルッターは事足れりとはしないであらう。ルッターが其の猶太人觀に於いて形而上學的なものを看破したことは此の論文の要點であるとしても、何時の場合にもさうである如く對猶太政策案としての解決は此の「形而上學的」なる語の中に朦朧として潜められてゐるのみである。

André Lelarge, Notes sur la formation des opinions de Paul-Louis Courier. (Revue d' Hist. litt. de la France, 45e ann. (1933) No. 2. (Avril-Juin) pp. 192—230.)

辛　島　重　義

本論文は筆者の新しきクーリエ研究（P.-L. Courier Parisien. Par. 1925）を基とし、これを補ふ意味にてクーリエの宗教上・政治上の意見の形成に關し、更に此意見と不可分離なる Pamphlets の起源に關して彼の思想上に影響したと思はれる彼の先輩諸教授及同僚との關係を述べたもので、特に彼の宗教上の方面には興味ある論をなしてゐる。先づクーリエは父より歴史の觀念と數學と羅典語を習び、Callet に、Labey に數學を學ぶ。次に希臘語を Vauvilliers に Collège Royal に教を受ける。このヴォーヴィイエを通し、同校の諸教授やその友人達と相知り彼の藝術上に及ぼす影響は大であり、後年の古典飜譯の素地も此處に存する。又此ヴォーヴィリエがヤンセン派である事は注目され、クーリエの宗教はこれに負ふ所大である。彼の父が此派に同情し、又彼の家庭教師ヴェトゥル が此派であつた事も關係してゐるが、筆者は此點より必ずしも彼がヤンセン派なりとは斷定してはゐない。中庸的にして溫和派なりし彼が、兩院に宛てたる劃期的の請願書の起源は勿論、他の當時の諸事情に顧らるべきも Laborde, Clavier, Daunou 等に依る所多い。中ドヌウは住居の接近せる關係によりクラヴィエとは意見が共通なるを見得る。要するに彼はその教育、環境、徹底的觀察、明敏さ等の理由は彼をしてゼスイットの敵ならしめたものであり、此點彼に於ての宗教上の並びに政治上の意見の特殊性が見られる。尙終りに簡單に經濟上社會上の意見を附記してゐるが、一般的に

考へられる程明確なものでなく、恐らく彼は重農派と稱せらるべしとなしてゐる。以上ルラルジュの說はその所論頗る多岐錯雜たるを免れず論據整然たりとは呼び得ざるも多くの時人を拉し來つて、恰も多人數の傳記を讀むが如き感を懷かしむるものあるも、多少稗益するところあるを認める。

Lucienne Mercier, L'histoire de Duguesclin dans l'Histoire de France de Michelet.
(Revue d' Hist. litt. de la France. 45e ann. No. 3. 1938. Juillet-Sept. pp. 325—359)

辛島重義

Gabriel Monod は Michelet を評して「彼は單に心理的道德的哲學者、藝術的感覺を最上級に賦與された偉大なる文學者なるのみならず又學者でありérudit である」と賞讃した。然るに Rudler はミシュレのジアンヌ・ダルク傳を研究してその著の歷史史料的缺點を指摘しミシュレは人の云ふ如き historien érudit ではあり得ないし、又絕對にさうでない、只彼は作家とし又思索家として稱すれば足る旨を極言した。今メルシェは上記の論文にミシュレの「佛蘭西史」第三卷デュゲスクランの項を檢討する。先づ Froissart の年代記であるが、一八二七年版を用ゐる。彼の註二〇五中この年代記よりは八四を得る。しかも註はリュドレの言に依れば「彼の說明せんとするテクストには何等の關係なく只批判材料を大ならしめ、その著に érudit 的外貌を與へんとするに過ぎぬ」ものである。一章七七頁に八四の註は平均各頁に一つとなる。從つてメルシェはフロワッサールを用ゐること少しと斷ずる。又彼の引用の方法を見るに、その引用を餘りにも縮めるために文意達せざるものある。それはその引用が當を得ない引用なるが故である。かくて種々比較驗討するに引用符を用ゐて純粹單純に引用するもの、一節の要約を文章の主要要素又は語句を以て殘すもの、又文章自身を解釋使用するもの最後に一人格に就き語句又批判而して心理的狀態に就いて要約するもの等の方法を用ひる。彼は又當時の學者の érudition の結果を利用する。これも藝術家としての偉大さは認めるも學者としての凡庸さを見る所である。彼は記錄の誤謬を其儘使用して、僅に二例のみその誤謬を指摘する。然しこの二つの訂正によるも、その誤引用の夥しきに比すれば問題とならぬ。次に Sismondi を見る。ミシュレは盛にシスモンディを piller（盜用）する。これは彼の史料準據 documentation を深めるものでなく、その méthode も凡庸である。フロワッサールとシスモンディとは彼等の根據となるも實を云へば科學的根據なきものと云つてよい。更にメルシェは筆を進めて種々の史料と對比研究し

て結論として云ふ。彼の方法は彼の理想とする所に達してゐない。ミシュレは材料の上から、近代科學の原理に基いて「佛蘭西史」を作成することが出來なかつたのである。彼は自ら想像した如き學者として動くことは出來なかつたのだ。しかし彼はヴィコによつて導かれた一哲學者である。彼に對する賞讃はその文體に存する。迅急、複雜生氣ある語句、色彩に富み、感情と生命に充ちる。彼が文學者たること心理分析哲學者たることは疑はないが、しかし如何なる點に於ても「學者」とは呼び得ないと。

○ビスマルク文獻展

ビスマルク文獻展は五月十四日(日)の開學記念學内解放日には會場たる農學部に於て開催、其第一講義室に西洋史學研究室所藏のビスマルク關係文獻を一般の展覽に供した。總册數約百七十、ビスマルクに關して其全集、書簡集、外交文書、日記、覺書、其他單行本、特殊問題研究等より、一般歷史書等の關係文獻並に書簡肖像等、一般に熟知すると否とに拘はらず、部類別にして陳列した。午前は學内關係の、午後は一般の此方面に興味ある人士の注目を惹くものが尠くなく中には熱心にノートされる人もあり、荒川總長も時餘に亘つて熱心に觀覽せられた。次に展覽出品物には長先生小林先生の出品もあり、茲に深く感謝する。尙展覽物の目錄は本研究室にて印刷の上、關係方面に頒布する筈である。（辛島）

九州支那學會

第十一回例會

昭和十四年五月廿一日、於九大三畏閣

一、陽明學と神道　小土安司氏

一、フェートン號の航海日誌について　中江副手

一、支那論理思想の意義　楠本教授

第十二回例會

昭和十四年六月二十五日。於三畏閣

一、鏡花緣につき　松枝講師

一、五代に於ける南北交通路　日野助教授

昭和十四年度第一學期

九州帝國大學　法文學部史學關係講義題目

日本思想史　竹岡教授

近世思想史　同

演習（徒然草）

國　史

中世に於ける日本紀の研究　長沼教授
演習（日本紀講讀）　同
演習（古文書講讀）　同
考古學概論　鏡山講師

西洋史

西洋史概說（近世前期）　長教授
特講（佛蘭西近代の政教關係）　同
特講（ドイツ國民主義の發展）　小林講師
演習A（Léon Daudet: Les Universaux. 1930. Paris, B. Grasset）　長教授
同　B（Friedrich Meinecke: Die Entstehung des Historismus.）　小林講師

東洋史

概說（支那最近百年史）　重松教授
特講（支那中世の都市佛教文化の研究）　重松教授
元代史概說　重松教授
演習（史記「平準書」及び「貨殖列傳」）　日野助教授
日野助教授

其他

古事記序說　高木教授
近世國文學概論　小島助教授
國語音韻史　笹月講師
生活・文化の反映としての英語史　豊田教授
中世英文學史　中山助教授
佛蘭西文學史概說　進藤助教授
十九世紀獨逸文學史　小牧教授
獨文學史（獨逸古典主義）　佐藤助教授
詩經講義　日加田教授
近思錄講義並演習　楠木教授
基督教思想史　佐野教授
支那畫論史　矢崎教授
印度哲學史概論　干潟教授
日本法制史　金田助教授
現代歐洲の政治　今中教授
西洋法制史演習　武藤助教授
佛國法律思想　野見山講師
西洋經濟史　三田村教授
經濟學史　波多野教授

臨時講義

西洋史特講（宗教改革史、殊にルーテルの事蹟について）　渡邊講師
日本佛教史　花山講師
宗教學　姉崎講師